認定医症例報告

部分床義歯により機能回復した1症例

濱野 奈穂

A Case of Prosthetic Rehabilitation Using a Removable Partial Denture

Hamano Naho

抄 録

症例の概要：患者は、クラウンとブリッジの脱離および義歯の不適合による咀嚼障害と強い違和感を訴え来院した。最初に暫間義歯と旧義歯調整により咀嚼障害の緩和を図った。治療は、前後の変化が少ない下顎を先行させ、装着感を確認後上顎に着手した。歯冠部は硬質レジン前装冠で補綴し、欠損部は違和感を訴えていた連結装置・支台装置の設計を変更した部分床義歯を装着した。

考察：支台装置・連結装置とも形態を考慮し、違和感を減少させて、患者の満足度を確認しながら治療したことが、成功した一因と推察する。

結論：部分床義歯は症例に応じて設計の自由度があり、適切な設計を行えば、患者の高い満足度が得られることが示唆された。

和文キーワード

支台装置, 連結装置, 部分床義歯, アタッチメント

ABSTRACT

Patient : In addition to crown and bridge detachments, a patient suffered from masticatory dysfunction and discomfort resulting from poor-fitting dentures. Masticatory dysfunction was resolved by the use of provisional dentures and re-adjustment of existing dentures. Treatment was initiated from the mandible where changes before and after the treatment were less significant. After confirming a good fit for the lower denture, treatment of the maxilla was started. Crowns with hard resin facings were fabricated, and the connectors and retainers for the partial denture were re-designed to eliminate the cause of discomfort.

Discussion : Efforts centered on attaining optimal retainers and connectors that would relieve the patient's discomfort. We implemented a step-by-step treatment plan while continually monitoring the patient's satisfaction, which contributed to the success of the treatment.

Conclusion : Partial dentures have some design allowance to accommodate requirements specific to each individual patient. Optimally designed partial dentures was proven to deliver high patient satisfaction.

Key words

retainer, connector, partial denture, attachment

図1 Intraoral views at the first examination
初診時の口腔内写真

I. 緒 言

補綴装置装着の目的には、咬合・咀嚼・発音などの機能や審美性の回復に加えて、残存歯・顎堤・顎関節の保護などがあげられる。一方、補綴装置に対する患者のニーズは多岐にわたり、どのタイプの補綴装置を選択するかは、患者が欠損によりどのような障害を抱えているのかに密接に関わってくる。特に、部分床義歯を設計するうえで、支台装置の選択が治療結果を大きく左右することが知られている。今回、支台装置としてエーカースクラスプ、連結装置としてリングバーを使用した部分床義歯により、義歯に対する違和感が生じていた。そこで、連結装置と支台装置の設計を変更した部分床義歯を作製することにより高い満足度が得られたので、症例報告する。

II. 症例の概要

1. 症例

患者：55 歳，女性。

初診：平成 11 年 6 月 14 日。

主訴：7| クラウン，⑥5 4 3 ②①| ブリッジ脱離および下顎義歯の不適合による咀嚼障害と強い違和感。

現病歴：上顎のブリッジおよびクラウンは約 30～40 年前に装着し，下顎義歯を初めて装着したのは約 20 年前である。義歯はその後数回再製したが，当初からの強い違和感は緩和されなかった。

2. 診査・検査所見

診査所見：現症は，欠損部には，⑥5 4 3 ②①| ④5 6 ⑦| ブリッジ，7 6|6 7| に部分床義歯が装着

図2 Dental radiographs at the first examination
初診時の X 線写真

され，7| クラウン，⑥5 4 3 ②①| ブリッジ脱離，7 6|6 7| 義歯不適合のため，咀嚼障害が生じていた（図 1）。

検査所見：X 線写真より，残存歯は 5| に歯根破折，7 6|1 2 4 7|，4 5| に不良根充・根尖病巣が認められた（図 2）。歯周組織検査では，歯根破折している 5| 以外は歯周ポケットも全顎的に 3 mm 以下で異常所見は認められなかった（表 1）。

3. 治療方針

初診時治療方針は，以下に示すとおりである。

1) 主訴改善のため，最初に 7-3|4-7| 欠損部（7 6|4 7| 残根上）の暫間義歯，7 6 5|6 7| 欠損部（5| 抜歯）の即時義歯を作製し，咀嚼障害の緩和を図る。

2) 残存歯の抜歯・根管治療を行い，最終補綴処置に移行する。

3) 下顎の義歯は患者が連結装置とクラスプ舌側腕に違和感を訴えていたため，連結装置・支台装置の設計を変更する。

4) 2 1|1 2 3|（連結），4|，4 5|（連結）は硬質レジン前装冠，7-3|4-7| 欠損部，7 6 5|6 7| 欠損部はアタッチメント義歯を作製する。

しかし，患者との話し合いの結果，以下のように変更した。

1) 主訴改善のため，最初に 6-3| 欠損部（6| 残根上）の暫間義歯作製と旧義歯の不適合改善を行い，咀嚼障害の緩和を図る。

2) 3) 変更なし

4) 上顎は治療前後で口腔内が大きく変化するため下顎の治療を先行させ，装着感を確認後上顎の治療を開始する。ただし，下顎治療開始前に，上顎基準平面にずれがないことを確認する。

表1 Periodontal conditions at the first examination
初診時の歯周組織検査

Mobility	0		0								0		0		0		0		0		0		0						0						
Probing Depth	1	1	3	1	1	2						2	2	2	②	2	1	1	1	1	②	1	①	2	1	2	2	1	2				2	1	1
	1	①	②	1	1	1						2	2	2	2	1	1	2	2	1	1	1	1	2	2	2	3	2	2				2	2	2
	7		6		5		4		3		2		1		1		2		3		4		5		6		7								
Probing Depth						3	3	③	2	1	2	1	1	1	2	1	2	2	1	2	2	1	1	1	1	1	1	2	1	1	2	1	1		
						2	②	④	2	1	2	2	1	2	2	1	1	1	1	1	1	①	1	②	2	1	2	2	1	2	2	1	2		
Mobility					0		0		0		0		0		0		0		0		0		0		0

図3 Intraoral views at insertion of mandibular final prostheses
下顎補綴治療終了時の口腔内写真

III. 治療内容と経過

1. 治療内容

平成11年6月～平成12年2月：まず、残存歯の歯周初期治療およびブラッシング指導を行った。そして、主訴改善のため、6-3欠損部（6残根上）に暫間義歯を装着し下顎旧義歯を調整して、咀嚼機能の緩和を図った。上顎暫間義歯は、増歯に対応しやすいように口蓋側はレジン床を立ち上げ、7 2|4 7にレストなし単腕鉤を付与した。その後、下顎の補綴前処置として5の抜歯、4|4 5の根管治療を行った。

平成12年5月～平成12年10月：下顎の補綴治療を開始した。4、4 5（連結）は硬質レジン前装冠を装着し、7 6 5|6 7欠損部は、アタッチメント義歯（Mini-SG, C-M社）で補綴した（図3）。

平成12年11月～平成13年3月：下顎義歯の装着感が良好で、初診時治療計画に従って上顎の積極的な治療を行うことに同意が得られたので、上顎補綴前処置として7 6|4 7の抜歯、2 1|1 2の根管治療を行った。

平成13年3月～平成13年8月：上顎の補綴処置を行った。2 1|1 2 3は舌側にミリングを含んだ舌面レストを設置した硬質レジン前装冠（連結）で補綴した。7-3|4-7欠損部には、下顎と同様のアタッチメント義歯（Mini-SG）を装着した（図4）。

2. 経過

最終補綴装置装着後、満足度の主観的評価¹⁾として、下顎旧義歯と比較した新義歯の満足度に関する質

図4 Intraoral views and dentures with attachments after treatment
治療後の口腔内写真およびアタッチメント義歯

問11項目に対して7段階評価で回答を求めたところ、全項目において満足度が最も高い“(7) 以前よりも極めて良い”回答が得られた（図5）。

定期的に経過観察し、支台歯の診査やアタッチメントのメール下部を含めた口腔清掃指導の徹底を行っている。プラークコントロールは良好で、歯周ポケットも全顎的に3 mm以下を保っている（表2）。途中1～2回、Mini-SG プラスティックインサートを交換し、義歯の維持力を調節した。現在、装着後4年以上経過しているが、経過良好で機能・装着感とも十分な満足度が得られている。

IV. 考 察

本症例のように、義歯に対する違和感を訴えていたケースでは、インプラント治療も有効な補綴装置の選択肢になる。しかし、患者は来院当初、積極的な外科処置も拒んだため、部分床義歯で対応することにした。従って、患者の訴えを的確に捉え、十分なインフォームドコンセントの後治療に着手するように注意した。まず、違和感を訴えていた下顎の支台装置と連結装置の設計を変更した。旧義歯では、支台装置としてエーカースクラスプ、連結装置としてリングバーが設計されていたが、新義歯では、支台装置としては